

「本との出会い」

館長 長谷部 芳彦

幼い頃から形作られた、ものの善悪や価値判断など、私に少なからず影響しているものの一つに、「イソップ物語」があると思います。今でもお話しをよく覚えています。

自分の娘がお話を理解できるようになると、少し照れながらも、よく「読み聞かせ」をしました。猫を主人公にした「ノンたんシリーズ」は娘のお気に入りでした。「ノンたんノンたんブランコ乗せて」「だめだめ一人乗りするんだもん」などと平気で自分勝手に振る舞うノンたんが、少しずつ成長していくところが好きでした。

ある日、成人した娘たちと書店で「ノンたんシリーズ」を見かけました。当時のことが話題になり、娘たちが「ノンたん」を覚えていたことが嬉しくなりました。この後、三女は、長女の娘にと「ノンたんシリーズ」を何冊も送ってくれました。そのおかげで、孫も「ノンたん」の世界を知ることができました。

私自身の読書と言えば、最近、新たな視点を与えてくれる歴史小説家に会いました。門井慶喜さんです。その書「シュンスケ」では、伊藤博文が若かりし頃、松下村塾で関わった吉田松陰を「変わり者」と感じていたことが書かれていて、驚かされました。門井慶喜さんの小説を繰り返し読むほど、新鮮な喜びを感じることができました。

元はと言えば、たまたま手にした司馬遼太郎氏の書かれた心踊らされる本に出会えたことが歴史小説にどっぷりと浸かることとなりました。たった一冊の本との出会いが、自分の人生を豊かにしてくれていることを実感しています。

公民館図書室を利用される方々が、そういう本や作者に出会ってくれることを願っています。自分に合う本は必ずあるはずです。しかし、読んでみなければ物語に引き込まれ、想像の羽根が自分だけでは経験できない世界に連れて行ってくれることを経験できません。自分にとって心躍る物語はいくらでもあるものです。

地域の子どもたちには、保護者の方々が読書する姿を見せてあげられたらなあと思います。さらに、大人と子どもと一緒に静かに本を読む姿があれば、それがわずかの時間であっても、素敵な時間、空間になるのではないのでしょうか。

公民館図書室が子どもたちにとって、そして大人の方々にとって心躍る本との出会いの場になっていけるように努力していききたいと思います。